

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0572505931		
法人名	医療法人薫風会		
事業所名	認知症老人グループホーム元瀧荘		
所在地	秋田県にかほ市象潟町小滝字麻針堰19		
自己評価作成日	令和4年2月5日	評価結果市町村受理日	

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

2年間コロナ禍で自由に外出が出来ないことも多かったが、その分、職員一人ひとりがどうしたら喜んでもらえるか考え利用者に寄り添う時間を大切に過ごす事ができた。笑顔になる利用者を見て職員も良かったなど共感できることを大切にしている。そのために業務の改善や案を出してもらい日常生活を楽しむために話し合う機会を多く持っている。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/05/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人 秋田県社会福祉事業団		
所在地	秋田市御所野下堤五丁目1番地の1		
訪問調査日	令和4年3月4日		

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

鳥海山の麓、栗山池や元瀧などの景勝地が近く、敷地周辺には桜並木等々自然豊かな立地。法人が運営する病院や老人保健施設が隣接しており、日中夜間問わず、入居者の体調不良時や緊急時には、ホーム担当看護師に連絡相談ができ、医師の判断、指示を得られることが利用者、家族の安心に繋がっている。避難訓練、職員研修、利用者のレクリエーションやボランティアによる催し物など多岐に亘り法人の協力を得られる体制はホームの強みである。管理者職員共に勤続年数も長く、利用者家族の意見をじっくりと聞きながら「笑顔で楽しく安心して」暮らすための支援を実践している。食事や外出等、日常的に本人の希望をこまめに聴きかなえる姿勢は、「利用者に喜んでいただく事で自分たちも支えられている。」との職員の言葉からもうかがわれるホームの一貫した支援理念といえる。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～53で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
54	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	61	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
55	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	62	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
56	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	63	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
57	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	64	職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
58	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
59	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
60	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、代表者と管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	法人の理念を基に職員間で話し合い分かり易いホーム独自の理念を作り楽しく過ごしてもらえるように努力している。	「笑顔で楽しく安心して生活できるように」とのホーム理念はリビングの見やすい場所に掲げられている。訪問当日は理念が貼ってある壁面にひな人形と桃の生花が飾られており、理念の言葉が日常的に支援者に目視され、共有されていることがうかがわれた。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍で身内以外には会えない時期もあったが、親しかった友人がベランダ越しから会いに来てくれたり交流ができた。また併設の施設の催しも出来なかったためホームでの誕生会や季節の行事を楽しんでもらった。	コロナ禍以前は、地域の老人クラブ、小中学校等との交流は併設の施設の行事や催し物を通じ行われていた。町単位での地域との交流や繋がりが多く、ホームの人脈を通し、外出先で便宜を図ってもらうこともある。老人クラブとは芋煮会やグランドゴルフ、だんご作りでの交流が盛んに行われている。	
3		○事業所の力を活かした地域とのつながり 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に伝え、地域貢献している	町の認知症サポーターの催しに利用者が作った作品を飾ってもらい地域の方に伝えることができた。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2020年2月から運営推進会議を中止している。定期的に家族に要望を聞いたりしたが、一方的な報告になることが多かった。	紙芝居等々のボランティアを運営推進会議を通じて紹介してもらったとのこと。コロナ禍により運営推進会議の開催は外部委員の参加が望めず、文書で現状報告送付のみが続いている。	運営推進会議委員へ文書を送付した際は、意見や助言を頂きホーム運営の参考にすべく働きかけを望みたい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	生活保護課や認知症初期集中支援チームのやり取りがあり協力してもらっている。連携することで家族の要望に沿ったプラン作りや今後の方向性を明らかにするのにためになっている。	生活保護担当者とは定期的に連絡を取り合っている。市の長寿支援課認知症初期集中支援チームとは協力関係を築いている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	運営推進会議のメンバーが身体拘束委員になり委員会を行ってきたが、コロナ禍で運営推進会議を中止したため、元瀧荘職員全員が身体拘束委員になり取り組んだ。玄関の施錠も夜間だけにし日中は開放している。	身体拘束等適正化委員会を2ヶ月毎に開催、管理者が身体拘束にあたる事例や新聞記事など紹介し職員間で話し合い職員の意識の向上に取り組んでいる。玄関の施錠は夜間のみ、日中は開放している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待が起こる原因を考える努力をしている。実際に虐待が起こったニュースから考えたり話し合ったりしている。グレーな状態になり虐待になるなど加害者の精神状態なども考え事前に防げる方法を考えている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	以前、参加した研修会の資料を元に相談があった時に対応できるように準備している。実際身元引受人相談され、アドバイスした。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時、改正がある際には、十分に説明し納得していただいた上で同意書にサインをいただいている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族から何でも要望を言ってもらうようにし、可能な限り実現するように努力している。コロナ禍で我慢していた身内との面会を病院で身内とのお見舞いを兼ねて実現できた。	以前は担当制を導入していたが、利用者個別の詳細な情報共有のできる連絡帳を導入することで、担当制を廃止している。本人家族の外出や面会などの要望を、出来る限りかなえようと連絡調整しているホームの支援が記録からも確認できた。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	管理者を中心に毎日の申し送りで意見や要望を聞き管理者を通して法人上部に相談し結果についても報告している。	職員は勤務や休みなどの希望も管理者に話しやすく、よく対応してもらっているとのこと。管理者は職員の意見や要望を法人に伝えており、大型加湿器やテーブルを職員の要望にあわせ、設置していた。職員個々のストレスチェックを優先して実施している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者は管理者職員と話す機会を設け職場環境条件等について考えている。法人でストレスチェック制度も導入している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、代表者自身や管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	外部研修にはできるだけ参加したいが、コロナ禍で参加できなかった。ケアの本を使い勉強会を行った。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、代表者自身や管理者や職員が同業者と交流する機会をつくり、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	秋田県支部、由利本荘にかほ地区グループホーム連絡協議会に加入しており研修会や勉強会を計画しているが、コロナ禍で行なわれないため、現在は、ファックスで情報交換している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
II.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所前に直接本人に会い状態を確認したり、要望や抱えている不安な点を伺っている。その時に必要な医療機関や担当ケア等との連携を取り入居後も不安なく本人の安心を確保する体制を作っている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入所前に家族に会い抱えている問題や要望を伺い状況を把握できるようにしている。入居後も引き続き遠慮しないで意見や要望を教えてもらえるようお願いしている。		
17		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人の好きなことを一緒にしたり、リラックスして過ごせるように会話をしながら、どうしたいのか？考えたり、日々の暮らしで普通に行われている毎日の献立作りや食事作りを、時には教えてもらいながら行い感謝している。		
18		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人が関わってきた身内や知り合い、お友達との交流が途絶えないように、家族にも協力してもらっている。お友達が一目会いたいと言っているなど、家族から教えてもらい連絡をしてもらい面会が実現し喜んでもらった。		
19	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ禍で回数は少なかったがお友達や孫さんと会えたりオンライン面会ができて喜ぶ姿が見られた。その時は一緒に写真を撮り喜んでもらった。	コロナ禍でホームへの訪問、面会は制限があったがベランダや窓越しに、友人との面会をしたり、オンラインでのビデオ通話などを行ったりし喜んでもらった。電話や手紙等も手伝い、利用者の馴染みの人や場との関係が途切れないよう支援をしている。	
20		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士の関係も長くなり、馴染みの関係が出来ている。利用者に関わりをもてない場合は職員が間に入り話ができるように何気なく支援している。仲の良い利用者同士、一緒に食事作りをしたり洗濯物を畳んだりお互いに誘い合っている。		
21		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービス利用が終了しても、必要に応じて家族や関係者との情報交換をし支援を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
22	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日常会話の中から本人の思いを聞いたり、したい事、行きたい所を聞いたり、わからない時は、家族に聞き好きだったことや興味があったことを教えてもらい日々の暮らしの中で活かせるようにしている。その話は職員で共有し会話をする上で役立っている。	日頃から利用者の話をよく聴いて会話することで、本人の思いや意向を把握するようにしている。家族からの聴き取りや職員間で情報を共有し合い、より正確に本人の気持ちを理解し支援をするよう努めている。	
23		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、生きがい、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	家族やこれまでの利用したサービスの関係者から本人の生活歴やなじみの暮らし方を聞き継続できる事は、引き続きできるようにしたり、できないことがあった場合は、どうしたら良いか話し合えるようにしている。		
24		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	それぞれの好み、したい事を認知症状の状態を考慮し、心配な事や困っている事があれば解決策を考えたりしている。本人の有する力に見合った仕事を提供するように勤め、それがやりがいになるようにしている。		
25	(10)	○チームでつくる介護計画 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人の希望、家族の希望を確認し、職員間や関係者で意見を出し合い協力し、現状に合わせた介護計画を作成している。	毎朝夕の申し送りで情報を共有し、利用者の状態の変化を把握している。ケアプラン更新の際は、本人家族の意向を伺い、ケア会議での職員間の話し合いをもとに、ホーム担当看護師や医師、法人栄養士など専門職の意見や助言も参考にしケアプランを作成している。	
26		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の生活の様子を個別の介護日誌に記録し、いつもと違う変化を見逃さないようにしている。変化があった場合は、職員間で話し合い、解決しなければならないことの情報の共有、実践をし定期的に介護計画の見直しをしている。		
27		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	法人の施設に慰問があれば参加していたが、コロナ禍でできなかった。散髪は直接ホームに来てもらうことが事ができた。		
28	(11)	○かかりつけ医、かかりつけ歯科医、かかりつけ薬局等の利用支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医、かかりつけ歯科医、かかりつけ薬局等と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	家族や本人に事前に確認し、入所前からのかかりつけ医、かかりつけ歯科医の継続受診、希望時には同法人の協力病院にかかり、適切な医療を受けられるように支援している。	法人内の老人保健施設にホーム担当の看護師がおり、週1回ホームを訪問し利用者の健康管理や職員への介護や支援の相談助言を行っている。また隣接の病院へ必要に応じ受診でき、夜勤の医師が駆けつけてくれる心強い環境にある。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	入居前からの医療機関の受診希望は継続できている。現在は協力病院の診察を受けている。		
30		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	医療機関への受診の際は、情報提供書を作成し提供している。		
31	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化や終末期のあり方について事業所の指針を作成して同意書ももらっている。ターミナルケアが必要になった場合は家族と話し合い希望を聞き相談しながら他の医療機関や他の施設への紹介を行う体制で取り組んでいる。	入居時に重要事項説明と共に「重度化した場合における対応に係る指針」の説明を行っている。ホームでの看取りの支援は現在行っていないが、利用者の状態を家族に都度報告し、家族の希望を聴き医師とも相談しながら都度方針を決めている。	
32		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の実践訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時対応マニュアルを作成し、緊急時急変時に職員が慌てることがないように、初期から段階的にする対応の仕方を決めている。不備があった時に、再度話し合い見直しをするようにしている。		
33	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	法人全体で災害対策の取り組みを行っている。避難訓練は年2回行い、年1回法人全体で炊き出し訓練を実施している。	年2回避難訓練を実施し、うち1回は法人施設合同で実施している。目と鼻の先の老人保健施設への実際に避難(宿泊)した経験を有する。毎年1回は炊き出し訓練を実施しており、野外にテントを設営し、豚汁やカレーライスの炊き出し訓練に参加している。大人数分の大鍋を2台設置する光景は実に壮観である。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
34	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	利用者の尊厳を守るため、最善を尽くすように努力している。排泄時、入浴時のプライバシーの確保、各居室には内側からの施錠が可能で本人の意思でプライバシーが確保できる。外出の際は留守中心配のないように外側から施錠し安心してもらっている。	利用者の尊厳やプライバシーを守る支援に、管理者はじめ職員は、最善を尽くすよう努力している。利用者の思い違いを否定するのではなく本人の話を受け入れる姿勢で対応している。	
35		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日常生活をしながら、食事では食べたい物はないか？テレビ番組は何が観たいか？その都度希望や要望を気楽に話せるように、話がしやすい雰囲気を大切にしている。上手く伝えることが出来ない利用者には、その時々様子や表情から察するようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
36		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人ひとりの意思を尊重し、その方のペースに合わせて無理強いないように心掛けている。例えば今お腹が空いていない、今はお風呂に入りたくないなど、納得できるまで待ったり時間を掛け対応している。何パターンか提案し本人に決めてもらえるように工夫している。		
37		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	女性では化粧品を一緒に選んだり、好みの服装を選べるように支援している。特に寒い時は、重ね着をすることがあるが、本人が恥ずかしくならないように、声掛け等さりげなく支援している。		
38	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食べたい物を聞いてメニューに取り入れたり、本人の誕生日には食べたい物を聞いてお祝いしている。季節の料理や旬の物を取り入れたり、行事食など、食事が楽しめるようにしている。また、一人ひとりの力を活かしながら得意なことをしてもらえるように努めている。	献立は、利用者の希望を聴きながら、季節感や地域性にも配慮し、手作りしている。訪問当日も3人の利用者がじゃが芋や玉葱を切って調理を手伝っており、日常的に下ごしらえ等しているとのこと。当日は、和やかな雰囲気の中、利用者が食事を楽しむ様子が見られた。近くの栗山池公園での鍋っこ遠足も楽しんでいる。	
39		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう状況を把握し、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事摂取量や栄養のバランス、水分量が1日を通して足りているか観察している。併設の管理栄養士に定期的にアドバイスをもらい栄養管理体制を取り必要な時には、助言や指導をもらえる体制になっている。		
40		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の口腔ケアを実施している。介助が必要か見極め必要な利用者には残存能力に応じた支援をしている。		
41	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	本人の尿意や便意があることを大切に、ハッキリわからない場合も、行動から察して可能な限りトイレで排泄してもらえるように支援している。紙パンツやパットの使用も夜間のみにするなど、やりっぱなしにならないように気を付けている。	なるべくトイレでの排泄が出来るよう、日中は本人のタイミングを見計らい、声かけしたり誘導したりしている。夜間でも、トイレに起きた方を支援し、出来るだけ自力で排泄できるよう配慮している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	個人のバイタル表に排状況を記入し、観察している。個々の排便の周期を把握し便秘の場合には飲み物(冷たい水、牛乳)や、ヨーグルトやバナナを摂取してもらい便意を促している。また運動することで便意を感じるように促している。		
43	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングや健康状態に合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴を好まない利用者には、強制せず声掛けを工夫し機嫌をみて促がしている。入浴時間も体調に配慮し、ゆっくり入浴してもらえるようにしている。仲の良い利用者同士、一緒に入りたいという時もあり、見守りながら入ってもらっている。	入浴に消極的な利用者には、声かけのタイミングを工夫し、職員間で協力し勤めている。利用者からの希望で一緒に入浴したい方がいれば、一緒に入浴できるよう配慮している。ゆっくりと入浴時間を楽しんでもらうよう配慮している。	
44		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	個々の生活習慣や、その日の体調また前日の睡眠状況に配慮しながら休息したり、安心して眠れるように支援している。眠れない時は、話し相手になり原因を探って解決できるようにしている。心配事があって眠れない時はゆっくり話を聞くことで解決する事が多い事がわかった。		
45		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解に努めており、医療関係者の活用や服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	個々の処方箋の内容を看護記録に添付し定期的に看護師や医師に相談したり見直しをしている。薬剤の目的や副作用を理解し、服用の変化には細心の注意を図り送りをしている。		
46		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	本人自らが、自分の仕事としてやりがいを感じてもらえるように、得意な事を見つけやることの喜びを感じてもらえるようにしている。余暇時間には、好きなことをして過ごせるように支援している。併設の施設の行事も参加し交流の場を多くもてるようにしている。		
47	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍で、自由に外出が出来なかったが、買い物や外食など本人の希望に沿って出掛けられるようにしている。職員に遠慮なく言える関係になるように努力している。	コロナ禍によりホームの行事としての外出はなかなか出来なかったが、利用者個々の希望を聴いて通院帰りの買物や外食、ホーム周辺の桜並木や栗山池までの散歩など、利用者の声に寄り添って支援している。家族や関係者と協力し、墓参りなど本人の思いをかなえる支援も行っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
48		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	自己管理ができる利用者は、配達のできるお店から配達を頼んだり、直接買い物に行き支払いしている。		
49		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	携帯電話を使用している利用者もいれば、好きな時に自由に電話ができるようにしている。定期的に出している手紙を出すときには利用者に声を掛け、手紙を書かないか誘い、必要な手伝いをしている。		
50	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、臭い、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	廊下のソファが皆の集まる空間になっていることもあり、壁にテレビを設置し自由に過ごしてもらっている。暖房や冷房は温度や湿度に気を付け、快適に過ごせるように確認している。	建物全体が広く開放感があり、居室前の廊下は吹き抜けになっていて明るい。廊下にソファとテレビを配置することで、利用者の寛ぎの場になっている。陽気のいい季節には、リビングからテラスに出て外気浴やお茶の時間を楽しんでいる。テラスを利用し、バーベキューも楽しんでいる。杉林や桜、つつじ、栗、広葉樹が眺められる環境にある。	
51		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ホールは常に開放し自由に過ごせるようにしている。その時々で好きな場所で過ごせるように廊下やホールにソファを設置している。		
52	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入所時に、持参する物の制限はなく今まで使っていた物や家具を持参したり、途中で購入で買うこともできる。仏壇を持ち込みお盆やお彼岸の必要な支援や準備をしている。	居室は各々入所時に持ち込んだ家具調度を配し、ベッドの向きなど本人の希望を聴きながら設えてある。部屋の装飾も個々の好みに添ってなされていて、ベッドにお孫さんの写真を並べて寝る方には、本人の気持ちを大切にしている。	
53		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	利用者の残存能力や適用能力に応じて、居室の場所を考えたり、食事の席を考えている。玄関には長椅子を設置し、靴の脱ぎ履きがしやすいようにしている。気候のいい季節にはベランダで自由に過ごせるように、外用の椅子やテーブルを準備した。夜間自室で転倒しやすい利用者にはベッドの下にセンサーマットを使用し予防になるように支援している。		